

# 異文化コミュニケーションにおける 英語の表現力を育てる授業づくり

— A L T と J T E が連携したチーム・ティーチングを通して —

畑山 啓恵子<sup>1</sup>

グローバル化が進む中、外国語の習得のみならず、異文化を持つ他者への理解と配慮の上で外国語を積極的に活用しようとする態度の育成が求められている。本研究では生徒が学んだ語彙や文法などを実際の異文化コミュニケーションを通して活用することで英語の表現力を育てるための指導の充実を目指し、A L T と J T E が連携したチーム・ティーチングの在り方を探った。

## はじめに

世界的に著名なビジネススクールのインシアード(Institut Européen d'Administration des Affairesが語源、正式名称INSEAD)の研究によれば、英語は2050年においても世界で最も影響力のある言語であると予想されている(Chan 2016)。グローバル化が進む中、異文化を理解し、英語で他者とコミュニケーションをとる重要性は今後ますます高まると考えられる。『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説外国語編英語編』には、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」(文部科学省 2018)ことが外国語科の目標の1つに示されている。すなわち、外国語の習得のみならず、異文化を持つ他者への理解と配慮の上で、コミュニケーションツールとして外国語を積極的に活用しようとする態度の育成が求められている。また文部科学省による「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」には、高等学校における英語教育の改善の方向として、幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養うことを掲げている。外国語指導助手(Assistant Language Teacher、通称A L T)などの外部人材の活用促進が体制整備の一例として挙げられるが、中・高等学校の授業におけるA L Tの活用時間の割合の低さに課題がある(文部科学省 2014)。

その要因として、1987年の「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme、通称J E Tプログラム)自体がA L Tとのチーム・ティーチング(Team Teaching、通称T T)に関するノウハウなどが何もない状況からスタートし(山

岡 2008)、日本人英語教師(Japanese Teacher of English、通称J T E)の養成課程に関わる研究では、A L TとのT TはJ T Eにとって現場に出てから初めて経験するということが多く、活用方法を学ぶ研修の必要性を感じている現役教員が多いこと(奥羽 2017)が示されている。さらに、「T Tは受験にはマイナスである」と批判されてきた経緯もあり(望月他 2018)、T Tの効果的な活用方法についてはいまだ議論の余地がある。しかし、大学入学者選抜に4技能を測定する資格・検定試験の活用が促進される現在、T Tを否定的に捉えることは時代の流れに沿っていない。

異文化への理解と配慮の上で外国語を積極的に活用する態度をもち、英語話者と流暢なやり取りができる能力を養うためには、生徒がJ T Eだけではなく、日本語を母語としない人と英語を使ったやり取りを実際に経験する必要がある。A L Tは生徒にとって一番身近な異文化を持つ英語話者であり、実践的な異文化コミュニケーションの練習とフィードバックを与えてくれるかけがえのない存在であることから、A L Tとの効果的なT Tの推進は喫緊の課題であると考えられる。

## 研究の目的

本研究では生徒が学んだ語彙や文法などを実際の異文化コミュニケーションを通して活用することで英語の表現力を育てるための指導の充実を目指し、A L T と J T E が連携したチーム・ティーチングの在り方を探る。

## 研究の内容

### 1 研究の背景

#### (1) T Tとは

T Tは教員の組織改革を目的に1957年にアメリカで始まり、1963年に日本に初めて導入され、1968年の学習指導要領において指導改善を目的に研究実践が勧

1 神奈川県立新城高等学校  
研究分野(授業改善推進研究 外国語(英語))

められるようになった(岩田 2017)。文部科学省(当時は「文部省」)は英語科におけるTTを「日本人教師(JTE)と外国人指導助手(ALT)の両者が、生徒のコミュニケーション的な表現活動を創造するために、協同で外国語の授業に取り組む試みである」と定義づけた(Leonard 2001)。TTにおけるALTの役割は担当教員の主導のもと、担当教員が作成した指導計画・学習指導案に基づき、授業にかかる補助をすることであるとされている(文部科学省 2011)。しかし、上智大学がALT配置事業社のA社の協力を得て1800人を超えるALTを対象にしたアンケート調査では、①ALT及びJTEにTTに関する十分な研修や交流の機会がないこと、②ALTの活用についてJTEのみに裁量権があること、③多忙なJTEと授業の目的、授業計画や指導方法など必要な情報共有がなされていないこと、④中学校や高校では文法に対する比重が重すぎて、言語活動がおざなりにされた授業が数多く存在することなどが指摘されている(上智大学 2017)。

## (2) 生徒の実態

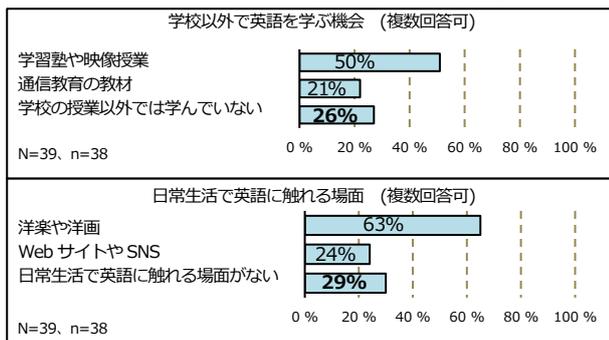
所属校1学年2学級の各半数の生徒計39名を対象に英語学習の状況や意識に関する調査を行った。必修の英語表現Iの授業で、74%の生徒が「書くこと」を最も多く経験したと回答している。具体的な授業内容を自由記述で確認したところ、ここで言う「書くこと」とは「自分の考えや気持ちを英語で書く」のではなく、「文法を学び、練習問題の解答を書く」という認識の生徒がほとんどであることが分かる。一方、「授業で最も身に付けたい英語の力」の項目では、66%の生徒が「会話すること」と回答し、英語を使ってやり取りができるようになりたいと思っていることが分かる(第1表)。

第1表 生徒の英語学習への状況・意識調査①

	聞くこと	読むこと	会話すること	発表すること	書くこと	その他(文法)
英語表現Iの授業で生徒が体験したこと	5%	11%	5%	0%	<b>74%</b>	5%
生徒が授業で最も身に付けたい英語の力	8%	8%	<b>66%</b>	3%	16%	0%

\*割合は小数第一位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。 N=39、n=38

また26%の生徒が学校以外では英語を学ぶ機会がないこと、日常生活においても29%の生徒が英語に触れる場面があまりなく、あったとしても「聞く」「読む」の受容的活動であることが分かる(第1図)。



第1図 生徒の英語学習への状況・意識調査②

## (3) 所属校のTTの実態

現在、所属校では1学年の英語表現IにおいてのみALTとのTTを行っている。1学級を出席番号で半分に分け、ALTと2名のJTEが同時に授業を展開している。英語表現Iの授業は4回中に1回ALTが片方の少人数クラスに訪れてJTEとのTTが行われ、残りの3回はJTE単独の授業が行われる。ALTは教科書の会話の部分、JTEは文法部分を指導するという役割分担がなされており、TTの授業ではALTが中心的役割を担ってモデルダイアログや発音の指導が、JTE単独の授業では文法の解説・演習がそれぞれ行われている。しかし、いずれの授業においても教科書の内容を教えることが大半を占めており、生徒が学んだ語彙や文法などを用いて「自分の考えや気持ちを表現する」機会が少なく、筆者も英語表現Iの授業の進め方について課題を感じてきた。所属校でTTを行なっているJTE6名にアンケート調査を行ったところ、5名がTTに課題があると答えている。特に「ALTとJTEが授業について話す時間を確保すること」、「授業でALTと生徒が話す機会を増加すること」を改善すべき点として挙げていた。これまでの高等学校学習指導要領では、英語表現Iの目標に「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」(文部科学省 2010)と示されている。この目標を達成し、多くの生徒が望む「会話する」能力の育成のためには、これまでの授業形態を大きく改善する必要がある。そこで、本研究ではTT及びJTE単独の授業が相互作用し、生徒が授業で学んだ表現を用いて「自分の考えや気持ちを表現する」ことができるよう、単元を見通して授業をデザインすることとした。

## 2 研究の構想

### (1) 仮説

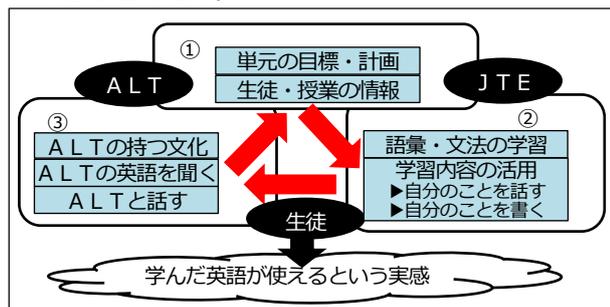
本研究における仮説は次のとおりである。

ALTとJTEが連携したTTによって、生徒が学んだ知識を実際の異文化コミュニケーションで活用する機会を充実させることで、英語の表現力が育まれる。

### (2) TTを活用した学びのサイクル

どのようにALTとJTEが連携し、TTを生徒の学びにいかすかを次のように構想した(第2図)。まず、①ALTとJTEが単元の目標や計画、生徒や授業の情報等を共有する。次に、②JTEの授業の中で語彙や文法等の基本の定着と活用場面を想定した基礎的な練習を繰り返す。そして、③ALTとの授業において、異文化に触れながら練習した内容を活用して実践練習を行う。このサイクルを通して、生徒に学んだ英語が

使えるという実感を持たせ、英語の表現力を育むことができると考えた。



第2図 TTを活用した学びのサイクル(構想)

### 3 ALTとの打合せ

ALTとの打合せは全8回行った。筆者が所属校のALTとTTを行うのは初めてだったため、最初の3回は互いの自己紹介や研究のねらいの説明、ALTの国の文化について教えてもらい授業の構想に役立てた。次の2回はLesson Plan & Reflection Guide(以下、「LPRG」という)というシートを作成し、検証授業の目的の共有を図った(第2表)。最後の3回は教材の検討やTTの練習を行った。LPRGや教材の原案は基本的にJTEが作成し、打合せの際にALTと確認し、互いにアイデアを出し合いながら修正を行った。

第2表 LPRGの概要

項目	記入内容の具体や例		設定者
単元目標	勧誘や申し出ができる(話すこと[やり取り])		JTE
単元計画	※詳細は第3表		
教材準備の役割分担	活動 教材 担当者	フィリピンに関するクイズ パワーポイントのスライド ALTとJTE	ALTとJTE
本時の流れ	※生徒の活動及びALTとJTEの指導の役割分担		
本時の振り返り	※良かった点と改善点を確認し、次回に向けてのアイデアを共有		

### 4 検証方法

#### (1) 事前・事後アンケート

事前・事後アンケート結果を比較し、検証授業における生徒の学習意識の変容を分析・考察する。

#### (2) 生徒の感想

Google フォームに送られた授業の振り返りと事後アンケート調査(1学年39名11月実施)に記述された生徒の感想を分析し、検証授業で行った言語活動の効果について考察する。

### 5 検証授業

#### (1) 概要

【検証期間】令和2年10月21日(水)~11月5日(木)

【対象】新城高等学校1学年39名

(1年1組前半20名、1年5組後半19名)

【科目】英語表現I

【授業時数】5時間

【単元学習内容】勧誘・提案の表現、動名詞

【単元における言語活動の目標】

相手の文化や好みに気をつけながら、娯楽または食事に英語で誘うことができる。

第3表 単元計画

時	授業者	活動	教科書の内容
1	ALTとJTE	①文化の違いについて考える (フィリピンに関するクイズ) ②勧誘・提案の表現を整理する 勧誘・提案に使える表現 了承する ・ How about doing~? ・ Let's do~ など 応答に使える表現 断る ・ OK. ・ That's a good idea. など ・ I don't feel like doing~. ・ I'm sorry. など	勧誘・提案の表現
2 3 4	JTE	①勧誘・提案の表現を使い、シチュエーションに応じてペアで練習する ▶体験してみたいフィリピン文化 ▶新しく始めてみたいアクティビティ ▶学校周辺の行ってみたいお店 例) 体験してみたいフィリピン文化  フィリピンフェスティバルに参加するという想定で、クラスメートを体験したいフィリピン文化に誘う ②動名詞の用法を学ぶ	動名詞
5	ALTとJTE	【ステーション・ティーチング】 ①ALTを海外の友人と想定し、神奈川県での娯楽や食事に誘う ②つながる音の書き取りをする ③動名詞の用法を活用する ▶脱出ゲーム ▶模擬アメリカ大統領選挙	発音

言語活動の目標達成のため、第1時の授業では、勧誘・提案の表現を整理し、第2時から第4時の授業では、語彙や文法の知識を増やししながら、第1時で整理した表現を活用して生徒同士で練習する場面を設けた。第5時のTTの授業では、まとめとしてこれまで学んだ知識を復習しながら、ALTを相手に勧誘・提案の表現を活用する実践練習を行うこととした。

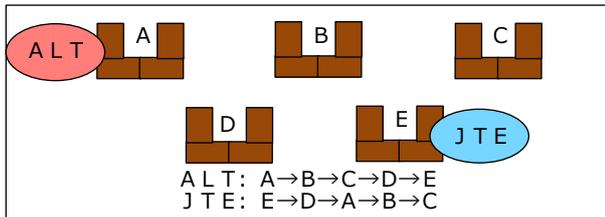
#### (2) Googleフォームの活用

検証授業では全ての県立学校に導入されているG Suite for Educationで2種類のGoogleフォームを作成し、活用した。1点目は、授業の振り返りとして生徒の学習到達目標の達成度や授業の感想、個別の目標を確認し、検証授業の改善にいかした。また、生徒とALTの交流の機会を増やすことをねらいとし、ALTへの質問コーナーを設けた。2点目は、JTE単独の授業で学んだ動名詞の用法を用いて生徒に創作文を作らせ、匿名でフォームに送られたものを添削し、一覧表にまとめて配付した。Googleフォームで創作文を集めることで、①教科書の演習問題だけではなく自分の考えや気持ちを英語で書く経験を多く持たせること、また、②匿名で創作文を集めることで間違いを恐れずに学んだ英語を使ってみることに、さらに、③添削され

た創作文を共有することで間違いの中から学ぶ大切さに気付くことをねらいとした。

### (3) ステーション・ティーチング

限られた授業時間の中で様々な学習活動を行いながら、生徒がALTと1対1で話す機会を持てるように第5時の授業ではステーション・ティーチング(Station Teaching)という学習形態を取り入れた。ステーション・ティーチングとは、関連性のある学習内容を行う学びのステーションをいくつか用意し、少人数グループに分けられた生徒が、決められた時間ごとにステーションを移動する(Cook & Friend 1995)。本研究では、生徒がステーションを回るのではなく、生徒の少人数グループがステーションとなり、ALTとJTEがそれぞれのグループを回る形式を取った(第3図)。



第3図 検証授業でのステーション・ティーチング

生徒はALTがグループに来たときは①ALTを海外の友人と想定し、グループの各生徒がALTと1対1で神奈川県の実験や食事に誘う活動、JTEがグループに来たときは②つながる音の書き取りをする活動、教員がいないときは③動名詞の用法を活用する活動を行った(第4表)。

第4表 各ステーションの学習活動

① ALTを海外の友人と想定し、神奈川県の実験や食事に誘う  
1. "KANAGAWA TRAVEL GUIDE"を読む。

**KANAGAWA TRAVEL GUIDE**

[参考資料] [https://trip.pref.kanagawa.jp/img/static/kanagawaguide\\_english\\_2019.pdf](https://trip.pref.kanagawa.jp/img/static/kanagawaguide_english_2019.pdf)  
<https://trip.pref.kanagawa.jp/resources/welcome-to-kanagawa-en.pdf>

2. ガイドから神奈川県の実験や食事をを選び、ALTを何に誘うか候補を決めておく。

3. 「実験と食事に関するカード」を引く。

実験	食事
The person likes indoor activities.	The person is a vegetarian.
The person likes outdoor activities.	The person is a Muslim.
The person is interested in traditional culture.	The person is a Hindu.
The person wants to enjoy nature.	The person is allergic to eggs.

4. ALTはそれぞれの生徒が引いたカードに書かれた好みや文化を持つ人物になりきる。

5. ALTの持つ文化や好みを考慮しながら、神奈川県の実験や食事を一つ選んで誘う。(生徒一人につき1分程度)

② つながる音の書き取りをする  
1. Linking Soundsの仕組みを確認する。

2. ディクテーションを行う。  
3. JTEの後に続いて音読する。

③ 動名詞の用法を活用する

▶ 脱出ゲーム  
1. グループのメンバーと協力して行う。  
2. 英語で書かれた10個の問題(授業で学んだ内容)を解き、パスワードを見付け出す。

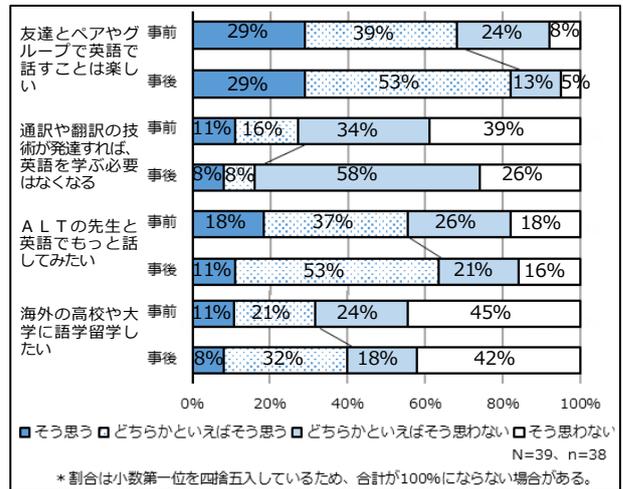
▶ 模擬アメリカ大統領選挙  
1. 脱出ゲームが終わったら、個人で行う。  
2. 2名のアメリカ大統領候補者の政策を読み、Googleフォームで模擬投票を行う。

## 6 結果

### (1) 事前・事後アンケート

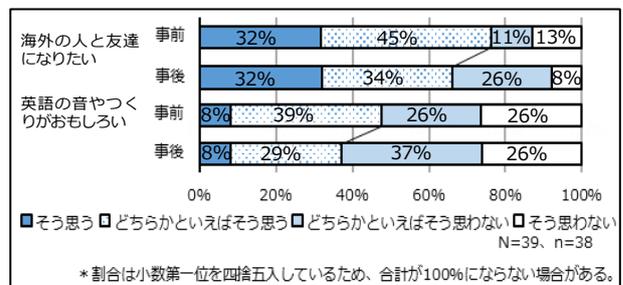
検証授業の事前・事後に同一項目でアンケートを実施し、英語学習に関する意識の変容を確認したところ六つの項目に関して大きな変容が見られた。

「友達とペアやグループで英語で話すことは楽しい」、「通訳や翻訳の技術が発達すれば、英語を学ぶ必要はなくなる」、「海外の高校や大学に語学留学したい」の四つの項目においてそれぞれ英語学習に関する意識に向上が見られた(第4図)。



第4図 英語学習に関する意識に向上が見られた項目

一方で、「海外の人と友達になりたい」、「英語の音や文の作りが面白い」の二つの項目においてそれぞれ英語学習に関する意識に低下が見られた(第5図)。この二つの項目に関しては、更なる分析が必要である。



第5図 英語学習に関する意識に低下が見られた項目

### (2) 生徒の感想

生徒の感想については Google フォーム(第5表)と

事後アンケート(第6表)のような記述が見られた。(※下線は筆者)

第5表 Google フォーム 生徒の感想(要約)

<b>異文化への興味や会話することへの意欲の高まり</b>
▶フィリピンの文化について初めて知ることが出来て良かった。フィリピンに行きたくなった。
▶話す力をつけたい自分にとって、クラスメートとコミュニケーションをとる機会が多いことが嬉しい。
▶英語の受け答えのバリエーションや日常会話で使いそうな英単語や文法も少しずつ学んでいきたいと思った。
<b>授業の課題</b>
▶途中からついていけなくなってしまう時がある。内容自体はすごく良かった。
▶ALTの先生のネイティブな英語がまだ完全に聞き取れないので少しずつ慣れていきたい。

第6表 事後アンケート 生徒の感想(要約)

<b>不安・緊張の中での達成感</b>
▶間違えることへの不安があったが、授業を通して間違った文法でも、単語をどんどん並べていけば通じるということを知れて、自信がついた。
▶面と向かって英語で話すのは緊張するけれど、何とか自分の知っている言葉、文法で伝えることができたと思う。
<b>実践の大切さを実感</b>
▶英語はコミュニケーションをとるためにあると思うので、グループで友達と話し合うのは楽しかった。
▶実際に学んだ文法などを友達と使い合って理解を深めるのが、コミュニケーションの向上や実用的である点から良いと思う。
▶習った文法を使ってペアの子とシチュエーションごとに会話することが、日常生活らしくて、この表現はこうに使うのだと身に付いたようで楽しかった。
▶目標とする英語の使い方を練習できた。英語と触れ合えて良かった。
<b>困難さと今後の見通し</b>
▶英会話は苦手なので難しかった。今後はもう少し自分に自信をもって話すことが重要だと思った。
▶覚えている英単語・文法が少なく、先生方の会話を聞き取れても、あまり意味が分からなかった。勉強の必要性を強く感じた。
▶いざALTの先生と話すとなると緊張して苦手だった。英語表現Iでは文法を学ぶが、書くというより会話ができるような授業を受けたい。

肯定的な意見からは、異文化への興味や英語で会話することへの意欲の高まり、実践を通して学んだ英語が使えるという達成感が見られた。一方で、英語のみの指示の聞き取りの困難さやALTとの会話に緊張が見られた生徒もいた。理解を促す支援を行いながら授業を進める必要と日本語話者同士(生徒とJTE、または生徒同士)での英語のやり取りを繰り返し、英語を話すことへの緊張を和らげた上でTTの中で生徒とALTとのコミュニケーションの機会を更に増加させ、慣れさせていく必要性を感じた。

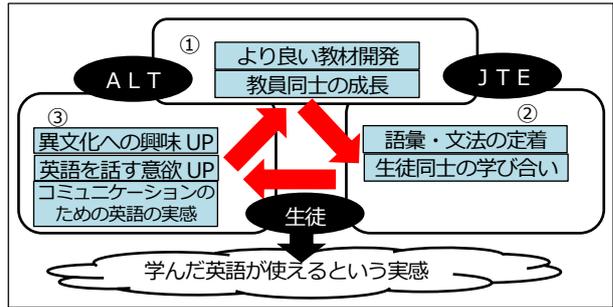
## 研究のまとめ

### 1 研究の成果と課題

#### (1) 研究の成果

まず、①LPRGを用いてALTとJTEが連携を図ることで、教員間に異文化コミュニケーションが生まれ、より良い教材開発や教員同士の成長につながった。また、②JTEの授業で学んだ語彙や文法の定着のため生徒同士の学び合いの機会を充実させることができた。さらに、③ALTとのTTの授業では異文化への興味や英語を話す意欲を高め、②の練習をいかした実践練習を行うことで英語はコミュニケーションのためにあるという実感を持たせることができた。この

サイクルを通して、一定数の生徒に学んだ英語が使えるという実感を持たせることができた(第6図)。



第6図 TTを活用した学びのサイクル(結果)

#### (2) 研究の課題

事前・事後アンケートの「海外の人と友達になりたい」、「英語の音や文の作りが面白い」という二つの項目に関して英語学習に関する意識に低下が見られた(第5図)。

前者においては、生徒の感想から異文化への興味が見られたものの、英語話者と1対1で話す緊張や苦手意識も見られた。アンケートの「自分が話したり書いたりする英語が正しいかどうか不安になる」という項目においては、事前では生徒全員が、事後では95%の生徒が「そう思う」、「ややそう思う」と答えており、依然として英語の発信に不安を感じていることが分かる。また、異文化を持つ他者への理解と配慮の必要性を伝えるために、筆者がALTの国では失礼に当たる贈り物をしてしまった失敗談や宗教における食事制限などの異文化コミュニケーションで気を付けるべきタブーを強調したことから、海外の人と関わることの楽しさよりも大変さを感じ取った生徒が多かったのではないかと考える。しかし、異なる文化的背景が誤解や失敗を生むことがある一方で、異文化が自国の文化にはない新しい価値観や考えを与えてくれることもある。生徒が異文化コミュニケーションの難点だけではなく長所にも目を向けることができるように異文化の取り上げ方について改善の必要がある。

後者においては、検証授業でコミュニケーションの時間を確保するため、文法の説明や演習の時間を縮小したことで、知識(文法)が活用(話すこと)に比べて軽視される結果に結びついたのではないかと考える。一方で、学んだ語彙や文法をコミュニケーションで活用することで理解が深まり、知識が身に付いたという意見も生徒の感想に見られ、知識と活用のつながりを感じている生徒も一定数いると考える。語彙や文法などの知識はコミュニケーションを支えるものであり、学んだ知識が活用される経験が英語の表現力を育む鍵となるため、学んだ英語が使えるという実感を持つことができる言語活動を繰り返し設定していく必要がある。

また、今回LPRGを活用することによって、ALTと単元の目標や計画、生徒や授業の情報等を共有して打合せを行い、授業内容を充実させることはできた

が、その分打合せ時間も多くなってしまった。今後、授業の打合せを重ねることで共有すべき情報が絞られ、打合せで重点を置くべき内容が分かり、多少の時間短縮も見込めるが、多忙なJTEと常勤ではないALTがいかに効率よく打合せを行っていきけるかが、TTを活用する上で避けられない課題である。

## 2 今後の展望

海外では近年2名以上の教員が行う協働授業がTTではなく、コラボラティブ・ティーチング(Collaborative Teaching)やコ・ティーチング(Co-Teaching)と呼ぶことの方が主流になっており、「2名の教員が授業をデザインし、指導する上でグループ学習の手法を使って協働すること(※日本語訳は筆者)」と定義されている(Robinson & Schaible 1995)。つまり、教員同士が協働するだけではなく、互いの持つ違いから学び合う姿勢が大切だということである。社会心理学の研究によれば、集団として発揮する力がメンバー個々の力の総和に及ばない「プロセス・ロス」という現象が起きることが多いというが、メンバーの力量や能力の総和を超えるパフォーマンスである「創発」が生まれることもあるという(山口 2008)。日本人同士であってもチームを築き上げることは難しいが、文化的背景が異なるALTとJTEがチームを組むことはより一層難しい。しかし、ALTとJTEが互いの違いを尊重して学び合いながら授業を行う姿は、生徒にとって異文化コミュニケーションのモデルとなる。グローバル化が進む世界で、生徒が異文化を持つ他者と英語を使ってどのようにコミュニケーションをとるべきかを実体験から学び、実用的な英語の表現力を育むことができるTTの重要性について今一度捉え直す必要がある。

## おわりに

“Teamwork makes the dream work.” 創発を生むチームを築き上げることは大変な苦勞を伴うが、夢のような素晴らしい結果に結びつく。“Team teaching makes the dream teaching.” となるようにALTとJTEが連携し、英語の知識や表現力、異文化を持つ他者との関わり方が生徒の将来にかされる英語の授業を作っていきたい。最後に、本研究を進めるに当たり、御協力をいただいた新城高等学校をはじめとしたすべての皆様に深く感謝申し上げ、結びとしたい。

## 引用文献

- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』 開隆堂出版 p. 25  
文部科学省 2019 『高等学校学習指導要領(平成30年度告示)解説外国語編英語編』 開隆堂出版 p. 16

- Leonard, J. T. 2001 『Team-Teaching Together ティーム・ティーチング成功の秘訣』 大修館書店 p. 126

## 参考文献

- 上智大学 2017 「小学校・中学校・高等学校におけるALTの実態に関する大規模アンケート調査研究最終報告書」  
[https://www.bun-eido.co.jp/aste/alt\\_final\\_report.pdf](https://www.bun-eido.co.jp/aste/alt_final_report.pdf) (2020年12月25日取得) pp. 18-26  
文部科学省 2011 「(別紙) 文部科学省が一般的に考える外国語指導助手(ALT)とのチーム・ティーチングにおけるALTの役割」(「外国語指導助手の請負契約による活用について」)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1304113.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1304113.htm)(2021年1月4日取得)  
文部科学省 2014 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)(2021年1月4日取得)  
岩田聖子 2017 「開かれた英語教育を目指して：チームティーチングからコラボラティブティーチングへ」(追手門学院大学『基盤教育論集』第4号) p. 18  
奥羽充規 2017 「英語教職科目におけるALTとのTeam Teaching Trainingの実践方法」(『四天王寺大学紀要』第64号) p. 64  
望月昭彦・久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司 2018 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法 第3版』 大修館書店 p. 181  
山岡憲史 2008 「ALTをもっと活用しよう resource personとして, informantとして」(『英語教育』2008年5月号 大修館書店) p. 18  
山口裕幸 2008 『チームワークの心理学 よりよい集団づくりをめざして』 サイエンス社 pp. 112-124  
Cook, L. & Friend, M. 1995 Co-Teaching: Guidelines for Creating Effective Practices. *Focus on Exceptional Children*. Vol. 28 No. 3 pp. 6-7  
Kai, L. C. 2016 POWER LANGUAGE INDEX Which are the world's most influential languages?  
[https://www.kailchan.ca/wp-content/uploads/2016/06/KC\\_Power-Language-Index\\_May-2016.pdf](https://www.kailchan.ca/wp-content/uploads/2016/06/KC_Power-Language-Index_May-2016.pdf)(2021年1月4日取得)  
Robinson, B & Schaible, R. M. 1995 Collaborative teaching. *College Teaching*. Spring95, Vol. 43 Issue 2, pp. 57-59